
薩摩塔の時空と背景

井形 進

九州歴史資料館

薩摩塔は、半世紀前に初めて存在が認識された、石塔である。その姿は、木造のそれを石で模した須弥壇の上に、壺型の塔身を据え、その上に、棟に強い反りをもった屋根がのるというもので、須弥壇の四面には、一面につき各一軀、四天王像が、塔身正面の龕中には、塔の主役である坐像が、肉厚な浮彫であらわされている。塔の姿といい、刻まれた尊像の姿といい、日本にある石造物の中では、異風際立つ存在である。

そもそもこの塔は、薩摩で存在が認識され、わずかに作例が知られていたもので、現在の呼称はそれに由来している。その後の調査の進展で、平戸周辺や、福岡平野周辺などからも確認され、むしろ分布の重心は、西北九州にあることが明らかになってきた。とはいえ、現状 30 基程を数える塔の所在が、九州内に限られている状況には、変わりがない。九州の信仰と造形について考える際には、看過できない意義をもった存在だと言える。

この薩摩塔に関しては、近年に至るまで、制作地や制作時期さえ絞り込めてはいなかった。そのような中で発表者は、福岡県糟屋郡久山町の、首羅山遺跡の塔にあらわされた四天王像の甲制に注目することで、これが中国での制作であることを推定した。そして同時に、同一時期同一工房の作だと看取される同遺跡の宋風獅子を、13 世紀半ばの制作だと推定した上で、両者を相補って考えることで、共に南宋時代の制作であろうとしたのであった。さらにその後、平戸の志々伎神社中宮に存在する作例の、薩摩塔においては初めて知られた銘文の判読を試みて、この塔を、元亨 3 年(1323)の奉納だとしている。

薩摩塔の時空に関しては、13 世紀を中心としつつ、12 世紀から 14 世紀にかけての中国に、絞り込むことができると考えている。軌を一にする見解は、近年の、石材を主対象とする研究においても出されている。そして、塔の移入者は、入宋僧や入元僧などではなく、博多綱首のような、中国人商人であろうと考えている所である。僧たちが活躍した京都や鎌倉他には塔が存在しておらず、中国人商人の拠点が存在し、あるいはその可能性が指摘できる、九州の特定地域からのみ見出されているからである。

主として尊像から塔の時空を、また分布状況から、移入や信仰の主体を押さえた上で、発表では、その背景へと考察を進めてみたい。従来薩摩塔に関しては、仏教的な側面を意識してきたし、事実そのような側面はもっている。しかしこの塔には、それ以外の信仰の反映も感じられ、むしろ神仙思想を重く見るべきか、との考えに至っている。最も重要である塔身が、壺型をしていることは、それを端的に示すものではないかと思う。壺は、中国の神仙思想の中では重要な存在であって、神仙世界そのものの表象でもある。薩摩塔を通して、今まで意識されていなかった信仰と造形の世界に、光をあててみたい。